

現代閩南語辭典

現代閩南語辞典

村上嘉英 編

天理大学おやさと研究所

序

この度、本研究所では、『現代閩南語辞典』を上梓することとなった。閩南語は、中国の代表的な方言の一つであって、本来福建省南部一帯で通用するものであるが、現在では台湾省全域から広東省の潮州や海南島の一部にも及び、東南アジア各地に居住する華僑の間でも根強い勢力を有している。中国の一方言ではあるがその使用人口はおよそ2800万といわれ、日本と一衣帯水の地で意想外に多くの人々により生活語として日常生活の中で使われている。

天理大学は、その前身の天理外国語学校創立以来、既に50数年にわたって近隣諸国の言語の教育と研究に大きな意を払ってきた。これは、創立の目的が世界たすけに挺身する人材の養成であり、教えは近きより遠きに及ぼしていくのが当然の過程であると考えてきたことによる。開校当初、まず朝鮮・中国・マレー・ロシアの各語部を置き、以後その他の語部を順次加えてきたのもこれがためにほかならない。

中国語は、外国語学校時代とその後の天理語学専門学校の名に改称した時代を通じて、これを第一部（北京官話）と第二部（広東語）に分け、中国の方言である広東語を専攻するユニークな課程を設けていた。昭和24年、天理大学となった後も、外国語学部中国学科にあっては専門科目の中で広東語をも必修とし、昭和41年には別に共通専門科目外国語部門で閩南語の教育を他に先がけて始めた。これは、朝鮮語の教育と研究と共に、本学の特異な伝統の一翼を負うものといえよう。

ことばは、社会的な基盤の上に立って人間が長い年月をかけて育み形成してきたものである。だから、ことばには共通語であれ方言であれいずれも温かい祖先の血が流れ民族の心が宿っている。方言

は、共通語の普及の陰に隠れて、その存在すらともすると忘れられがちであるが、しかし方言として立派な言語体系を内在させるものであり、往々にして共通語よりむしろ生々とした感情をあますところなく表現し伝えることができる。方言は共通語の影響を受けて徐々に細かな所では変化を見せているが、中国においてはまだまだどの方言も強い力を持ちそれを使う人の心のきずなになっている。閩南語を使う人たちの心を深く認識理解し、その人たちの心のひだの中に教えの喜びをひしひしと伝えていくためにも閩南語の習得と研究が有用であると思うゆえんがここにある。

本年1月26日、真柱より論達第三号が発表され、教祖百年祭への歩みがますます進められようとしているこの佳き時旬に、本辞典を世に送り出し得るのは私にとり大きな喜びである。これが大方に活用されて広い視野から中国と中国の文化を考究するために資し、陽気ぐらしの世界の建設にいささかなりとも役立ち、更には中国語学の伸展に寄与していくなれば望外の幸せである。

なお、本学と本研究所では今後とも方言を含めた幅広い中国語の教育と研究を鋭意進めていく所存であるので、本辞典に対しても江湖の建設的なご助言とご高見を仰ぐ次第である。

末筆ながら、編者の積年の努力を多とし、本辞典の編さんと出版に援助を惜しまれなかった多くの方々に深謝し、また忍耐強く印刷を担当された天理時報社の労にお礼申し上げる。

昭和56年3月

天理大学おやさと研究所長

山 本 久 二 夫

は し が き

中国の方言と共通語 中国の総面積は、ヨーロッパより広く人口も10億に近いので、各地方にさまざまな方言が存在するのは当然である。分類にまだ定説はないがよく次の8方言に大別される。すなわち、北方方言（北京語を代表とし西北方言・西南方言・下江方言を含め中国の総人口の65%以上が使用。共通語の基礎方言）、呉方言（上海語を代表とし使用人口約7700万）、粵方言（広東語、使用人口約4700万）、湘方言（湖南語、使用人口約4600万）、客家方言（広東・福建・江西・四川・台湾などの一定地域に方言区画を作って分布、使用人口約3700万）、閩南方言（福建南部と台湾に分布、使用人口約2800万）、贛方言（江西語、使用人口約2200万）、閩北方言（福建北部に分布、使用人口約1100万）である。これらの方言間で基本語彙と語法はあらまし共通するが、音韻の相違が大きいので、話は互にほとんど通じあわない。

一つの纏まりをもった近代的な国家を建設していくためには、全国共通のことばなしではいろいろな所で支障を来し困却する。それで中国が北方方言を基礎とし北京の発音を標準とする共通語の普及に力をいれるようになってから既に久しい。その成果は近30年来特に目覚しく、今では一部の老人を除いて全国どこでも共通語で用が足りる。しかし地方へ行くと、公的な場所では共通語を用いていても、家庭の中や街角など日常生活一般で用いることばはやはり依然として方言である場合が多い。

台湾の言語生活 長い年月を経て、台湾では閩南語・客家語・高山族語・日本語の四つの言語集団が形成されたが、第二次世界大戦後、中国各地から移住してきた外省人が北京語を基礎とした「国語」とその他種々の方言をもたらししたので、言語生活は更に複雑多様の呈を示すようになった。今これを概観してみると、標準語である「国語」以外では、閩南語が優勢で台湾全島どこへ行っても通用することが知れる。客家語は、新竹・苗栗・屏東・花蓮などにある方言区画内でのみ通用しその使用人口は台湾の10%程度といわれる。中央山脈の山地と東部に居住する高山族は、タイヤル・サイセット・サウ・ツォウ・ルカイ・パイワン・ブヌン・アミ・ヤミ・ピナンの10種族でそれぞれマレーポリネシア語系の独自のことばを話し、全種族の人口はおよそ30万余である。日本語は、日本の統治時代に日本語教育を受けた人たちの大部分が今もって使用することができる。

こうした環境の中にあって、台湾では必要に迫られほとんどの人が二つ以上のことばに精通しており、三重言語者も決して珍らしくはない。

収載語彙 本辞典では、台湾で通用している閩南語の語彙を収載の対象とした。一般には台湾語・台語・台湾福建語などといわれるものであ

る。歴史的な要因により、福建南部に通用する閩南語とは語彙や音韻の一部で若干の出入が見られるが、大略通じあうことはいうまでもない。

台湾で通用する閩南語と一口に言っても、詳細に分析すると各地でなお幾らかの差異があるのに気付く（→付録③方音差異対照表）。本辞典はインフォーマント（言語資料提供者）の関係で、台南で通用する閩南語を基準にしたが、方音で台北方音と差異のある場合、一一検索できるよう配慮してある（→凡例§2.(5)）。ただ、例外としてio^o [iō] がある。台南では、「張」「様」「腔」などの字を読むと韻母にio^oが出てくる。この音は台南方音にのみ存在し他の地域ではすべてiu^o [iū] に発音されるので、本辞典では実用的な見地を踏まえあえてiu^o に統一した。

見出し語 見出し語の数は、辞典本文 11767語、固有名詞 757語、総計 12524語である。語（word）をもって見出し語とするのを原則としたが、使用上の便宜を考え接辞と若干の複合語も入れた。

辞典の編さんには、見出し語の選定がきわめて重要である。本辞典では、基本語彙の遺漏を避けるため、

王育徳著『台湾語常用語彙』東京、1967

の収載語彙と次の3種の文献の全項目を閩南語に訳出したものの中から基本語彙を選定した。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編『アジア・アフリカ言語調査票 下』東京、1967

中国文字改革委員会編『普通話三千常用詞表』北京、1959

樺島忠夫編『基本語彙』（『日本語と日本語教育一語彙編』東京、1972）

特に『アジア・アフリカ言語調査票 下』から訳出した語彙はすべて見出し語もしくは引用例の中で収載するよう心がけた。こうして作成した基本の見出し語に、日常生活で入り用と考えられる語を各種の文献（→付録④主要参考書目）から抽出し、編者の主観に基づいて加えたのが本辞典の見出し語である。

閩南語は生活に密着した話しことばとして発達をみせたものなので、語彙の中に学術用語や専門用語あるいは文言語彙などがまだあまり多く定着していない。だから本辞典が収載した語彙は決して多いとはいえないが、台湾で閩南語を話す人が日常生活を営んでいく上で使う常用語彙はほぼ網羅できたと考える。

表記 本辞典の閩南語表記は、普通 pēh-oē-jī 白話字と呼ばれる教会ローマ字を採用した。閩南語の表記には、この外にカタカナ式・羅常培式・周弁明式・台湾方音符号・王育徳式などが考案されたが、いずれも教会ローマ字ほど普及していない。教会ローマ字は、キリスト教宣教師 W. H. Medhurst の手で考案されてより既に 150 年近くの歴史をもち、数

度の改良が加えられて十分使用に耐えられる。事実、教会ローマ字によって書き残された文献の数は多く、聖書・キリスト教教義書・閩南語学習書・閩南語辞典・啓蒙書・歴史書・翻訳書・会議録・雑誌など広範囲にわたって枚挙にいとまがない。

しかし、教会ローマ字が教会以外のところで使用されることはあまりなかった。一般には、自分の意思を書き表わしたり記録を留めたりする時、民族共通の文語で書き、これを話しことばとは別のところで形成されてきた文語音で読んだのである。日常生活の中で使われる閩南語をそのまま漢字で書き下すことは、「歌仔冊」という講釈の種本で僅かに試みられたが、語彙に公認の漢字をもたないものにあて字や作字を各所で用いており、苦心の跡が伺える。本辞典では、見出し語や用例のあとに漢字を付したが？や□で示した通り疑問のある場合や充当する漢字のない場合が少なくない（→凡例。 § 3）。

編さん経過 本辞典は、編者が昭和48年度文部省科学研究費補助金を「閩南語辞典編さん」の研究課題によって受けたのに始まる。これに当時のおやさと研究所長田中喜久男氏がいたく興味を抱き研究所の事業の一環に組み入れることを企画された。こうして、最初から台南出身のインフォーマントと専任の編さん助手を迎えることができた。語彙と用例の収集並びに草稿（カード）の執筆には編者が当たった。インフォーマントは編者の煩わしい質問によく答えると同時に、前記『アジア・アフリカ言語調査票 下』などの文献に収録された日本語の基本語彙を閩南語に訳出し、また草稿のすべてに目を通した。実にインフォーマントの範囲を越えて積極的に本辞典の編さんに参与されたのである。インフォーマントと編さん助手の献身的な助力を得て、僅かに2年8ヶ月という短期間のうちに草稿の完成を見た。直ちに草稿は最終検討を経て清書に移され、逐次台湾に送られインフォーマントとは別の校閲者の校閲を仰いだ。この作業が進行している途中で、編者は次の閩南語辞典の近著二種を相次いで入手した。すなわち、

Embree, Bernard L.M. : A Dictionary of Southern Min. 香港, 1973.

The Maryknoll Language Institute : Amoy-English Dictionary. 台中, 1976.

である。両辞典によって、本辞典の不足を補うこととし、校閲済の原稿と比較を行ない新たに多数の語彙を加えまた語釈の一部を改めた。ついで再度の清書をし、付録と日本語索引を編み、着手以来6年で脱稿を見、印刷が天理時報社に委ねられた。印刷は、ローマ字・「繁体字」・当用漢字・ひらがななどが入り混じっていたので、想像以上の困難を伴い校正を含めて2年余の歳月を要した。

インフォーマント・校閲者 完成には、インフォーマントと校閲者に負うところが大きい。お名前を明記し感謝の意を表す。

江樹生氏。1935年、台湾省台南県玉井郷玉井村生れ。台南市長栄中学を経て東海大学（台中）歴史系卒業。1970年、中国文化学院（台北市）史学研究所博士課程修了。同年同学院の副教授となり、1972年交換教授として天理大学着任。辞典編さん当初より離任までの2年4ヶ月間にわたりインフォーマントとして責を果された。

盧恩恵氏。1925年、台南市生れ。台南神学院卒業。現在、台湾基督長老教会牧師。1976年3月より約1年間、原稿の校閲を細心に担当された。

また、編さんは歴代の専任編さん助手（おやさと研究所嘱託）に支えられた。中村はるみ（編さん当初より4年4ヶ月間、草稿作成補助・配列・原稿清書など担当）、鈴木郁子（昭和54年度1ケ年間、校正刷り校正）、深川美智子（昭和55年度1ケ年間、校正刷り校正・日本語索引作成）の3助手の労は大であった。

このほか、英保弘子氏が日本語の部分を検討され、台北市出身の陳鋭が始終身近にあっていろいろ問題点を指摘してくれたのも本辞典のために有益であった。レイアウトは畏友吉川裕利氏による。

以上のように本辞典は先学の貴重な数々の業積の恩恵を蒙り、多くの方々の親身な助力を得たものであるがもとより不備誤謬がないとは言い難い。本辞典の一切の責は編者にあることを記して大方の叱正を請う次第である。

謝辞 本辞典を送り出すに当って、まず天理大学理事長永尾広海先生に深謝の念を捧げさせて頂きたく思う。先生には当時の天理教一れつ会理事長として編者に昭和37年より3年間台湾留学の機会を与られ閩南語研究の切っ掛けを作ってください、爾来今日まで暖かい目で見守っていただいている。本辞典がご高恩の万分の一にでも報いることができるならば幸甚に思う。

それから、前任おやさと研究所長田中喜久男先生のご熱意も忘れ難い。先生の力強い支持と督励を得ずに本辞典が日の目を見ることはなかったと考える。

天理大学長・おやさと研究所長山本久二夫先生には、出版の具体化に種々のご腐心を賜り、その上懇切な序文を頂いた。ご期待に添うよう浅学ながらなお研究を重ねさせて頂く所存である。

思えば、本辞典はきわめて恵まれた環境の下で編さんを進めることができた。これはおやさと研究所主任丸川仁夫教授と研究所事務室の配慮によることも多く衷心より感謝申しあげる。

編者 識

凡 例

§ 1 本 辞 典 の 構 成

- | | |
|----------|------------|
| I) 序 | VII) 日本語索引 |
| II) はしがき | VIII) 付録 |
| III) 凡例 | ① 度量衡比較表 |
| IV) 音節表 | ② 数量呼称一覧 |
| V) 辞典本文 | ③ 方音差異対照表 |
| VI) 固有名詞 | ④ 主要参考書目 |

§ 2 見 出 し 語

- (1) 表記は、教会ローマ字正書法に準拠し、適合する漢字を付した。
(2) 配列は、音節を単位としてアルファベット順にした。

a b ch chh e g
m n ng o o' p
ph s t th u

なお、鼻音化韻母は、それぞれの韻母の後に置いた。

〔例〕 a 啊 aⁿ 向 iû 油 iûⁿ 羊 kià 寄 kiàⁿ 鏡

- (3) つづりが同じで声調の違うものは、声調の順序によって配列した。

声 調	符 号	例
第 1 声	(不記)	to 刀
第 2 声	ˊ	tó 島
第 3 声	ˋ	tò 倒
第 4 声	(不記)	toh 桌
第 5 声	ˆ	tô 逃
第 6 声	(ˊ)	(tó 島)
第 7 声	ˊ	tō 道
第 8 声	ˋ	tòh 燻

つづりも声調も同じものは、付した漢字の画数順によった。

- (4) 見出し語の一部を〔 〕でくくった語は、その部分を省略してもさしつかえないことを示す。

〔例〕 iòh[-á]-tiàm 藥〔仔〕店

- (5) 台南方音と台北方音とで発音上の差異のある語は、一一併記した。

〔例〕 a-bó/-bú 阿母

lú-hêng/lú-, lí- 旅行

例では、台南方音でa-bóと発音するものが台北方音においてa-búであることを示す。lú-hêngは、台北方音で人や場所によってlú-hêngとlí-hêngの二つの発音が併用されていることを示す。なお、本辞典では、このような語について、台北方音からも検索できるように配慮した。

[例] a-bú 阿母 → a-bó

(6) 口語音と文語音を併明する語は、略号で示した。

⊙ 口語音

⊗ 文語音

[例] khó-koàn / ⊙-kng 考卷

文語音では、khó-koànであるが、口語音でのkhó-kngも併用されていることを示す。

(7) 見出し語にその他必要に応じて次の略号を付した。

⊗ 語調によって使い分ける音

⊙ なまった音

[例] ka-chài / ⊗ kai- 嘉? 哉

ak-chhiú / ⊙ at- 握手

§ 3 漢 字

- (1) ローマ字表記には、適合する漢字を付した。おおむねCampbell, W. : A Dictionary of the Amoy Vernacular. Yokohama, 1913 による。
- (2) 漢字に疑問のある場合には?をつけ、また充当するものがない場合は、□でもって示した。漢字表記にはあいまいな点がかなりある。

§ 4 語 釈 と 説 明

- (1) 語釈は、①②③…を用いて、できるだけ細かく分けた。
- (2) 品詞と接辞を略語で表示した。

[名]	名詞	[動]	動詞	[形]	形容詞	[数]	数詞
[量]	助数詞	[代]	代詞	[副]	副詞	[介]	介詞
[連]	接続詞	[助]	助詞	[嘆]	感嘆詞	[接頭]	接頭辞
[接尾]	接尾辞	[語幹]	語幹				
- (3) ◇のあとに、語の用法や語法上の説明、あるいは語釈の理解を助けるための解説を付した。
- (4) 別の見出し語を参照すべき場合、→で示した。二音節以上の語については漢字を付記しなかった。
- (5) 用例の中に見出し語が入る場合は、～に置きかえて示した。

- (6) 二音節以上の語で語源の明らかなものは、語釈の前に、(←)で示した。
- (7) 同義語と反対語はそれぞれ訳語の後に、(=)と(⊕)で示した。
- (8) 位相や学術専門語などには、必要に応じて、略語で指示した。
- | | |
|---------------|-------------|
| (文) 文語, 文語的な語 | (動) 動物 |
| (旧) 旧時代の語 | (植) 植物 |
| (俗) 俗語 | (鉦) 鉦物 |
| (罵) 罵語 | (魚) 魚類 |
| (諺) 諺 | (鳥) 鳥類 |
| (成) 成語, 熟語 | (虫) 虫類 |
| | (貝) 貝類 |
| | (化) 化合物, 化学 |
| | (医) 医学, 病名 |
| | (薬) 薬物, 薬学 |
| | (商) 商業 |

§ 5 固有名詞

固有名詞は、本文の後に中国の朝代名・中国人の姓など重要なものをまとめて掲載した。

